

# 「女子アナ」という職業

原 良枝

(甲南女子大学文学部日本語日本文化学科講師)

## はじめに

1980年代前半、筆者がアナウンサーになった時期に「女子アナ」という言われ方をされたことはなかった。女性のアナウンサーを指す言葉として女子のアナウンサーという言われ方は個々にはあったかもしれないが、単に男性アナウンサーと女性アナウンサーというような性別を表す以上に今日的な意味が織り込まれた「女子アナ」という言われ方はなかった。なぜなら、そのような「女子アナ」がいなかったからだ。

「女子アナ」は、バブル時代に放送メディアに華やかに登場した。彼女たちは、活躍の場を広げ、タレント顔負けの人気を得て注目を浴びるようになり、平成においてもなおその系譜は続いている。今や一般的になった「女子アナ」という言葉には、バブル期から今日に至る女性アナウンサーの一つの軌跡が刻まれているといっても過言ではない。「女子アナ」とは、どのような存在なのか。「女子力」という言葉が社会的に注目されている現在、「女子アナ」に込められた今日的なまなざしの意味を捉えながら「女子アナ」という職業の変遷とこれからについて考察していきたい。(なお、本稿でのアナウンサーとは、アナウンサーという呼称の本来の意味である「放送局のアナウンサー試験を合格した放送局の社員」を指す。また、民間放送局のアナウンサーについての考察であり、NHKのアナウンサーは含まない)

## 1 「女子アナ」の登場

「女子アナ」は、「1980年代以降、数々の人気バラエティー番組を世に送り出し、それ以降のテレビのあり方を方向づけた（とされる）フジテレビ」で誕生したと言われている。実際には、フジテレビの企業内の改革に端を発した一連の番組制作への取り組みと関連付けられるものであったという。1971年にフジテレビは、制作部門をすべてプロダクションとして分社化した。その結果、制作能力の低下を招き、状況を打開するため、1981年にプロダクションの本社復帰が行われ、プロダクションで採用された社員も全て親会社であるフジテレビの社員になった。フジテレビの社員となり本社へ復帰したスタッフたちは奮闘し、制作現場に活気が戻った。その後自社が打ち出した「楽しくなければテレビじゃない」のコピー通りの番組を提供し、フジテレビは破竹の勢いで民放の雄といわれるまでになった。このような企業の事情の流れの中で、「女子アナ」は誕生した。

雇用形態の変化も「女子アナ」誕生に作用した。それまでフジテレビの女性アナウンサーは「2年契約4年雇用保障」という雇用形態であったが、1980年代になり男女雇用差別が撤廃され、女性アナウンサーも男性アナウンサー同様の正社員という雇用形態になった。契約更新の雇用形態では、女性アナウンサーは26歳くらいに退職してしまう慣例があった。しかし、雇用形態が変わったことで、女性アナウンサーの勤続年数も伸び、局側としても女性アナウンサーを育てることが可能になり「女性アナウンサーの『改造』」<sup>2</sup>が行われた。 「女子アナ」の誕生という現象は、働き方や雇用形態の変化と大いに関係があったのである。

フジテレビが輩出した「女子アナ」への注目の視線は、他局の女性アナウンサーにも向けられた。当然、筆者が属している tvk テレビもその波はやってきた。地方局のアナウンサーというくくりで、雑誌や新聞

<sup>1</sup> tvk 株式会社テレビ神奈川、報道制作局アナウンス部勤務。

<sup>2</sup> 長谷正人 太田正一編著『テレビだヨ！全員集合 自作自演の1970年代』青土社 2007年第7章参照

の取材が相次いだ。注目されることは有難いし、雑誌に掲載されることも若い時分では嬉しいことである。しかし、タレントやアイドル、ましてや笑いをとるためにアナウンサーになったのではない当時の筆者を含めたアナウンサーにとって、「女子アナ」のウェーブは戸惑いの連続であった。

「女子アナ」のウェーブは、アナウンサーとは何かという軸が反転してしまうほど大きなものだった。事例を挙げてみよう。

アナウンサーは生きている言葉を不特定多数の視聴者へ届けることを仕事としている。ニュース原稿を読む時はもとより、番組の進行やコメントを発する際にしても、プロであるからには間違えることは本来あってはならない。しかし、「女子アナ」の表層的な番組の一部分だけを切り取って、言い間違いや、「とちる」こと（現在は「かむ」という表現が多用されている）に寛大になり、それが「天然ぼけ」（現在は「天然」と言われる）と評され、「むしろ、アナウンサー個人の個性が現れて親しみやすく面白い」、「それこそがテレビだ」という言説も現れた。

当時筆者は、tvkで2時間ワイド番組のメインMCとスポーツ情報番組<sup>3</sup>を担当していたが、フジテレビでコメンテーターを務めていた方などから、「フジテレビの女性のアナウンサーは間違いなど気にせずのびのびとアナウンスをしている」、「間違えることなど気にしなくてもいいのではないか」という発言を度々聞いた。また、あるフリーのプロデューサーからは、わざと間違えてみると笑いがとれるからやってみたらいい、という冗談とも取れない指摘を受けたことがある。

それまでのアナウンサーは、親しみやすさを前面に出すといっておきながらも、人間味があまりなく、堅物でお高くとまったテレビ側の人間であった。しかし、そのようなお堅いはずのアナウンサーが、間違えてもおおらかな反応をし、作られたものでないパーソナリティがそのまま放送されることに視聴者は新鮮さを感じた。こちら側（視聴者側）の人間としてアナウンサーが受け入れたのである。

フジテレビの「女子アナ」は、バラエティーや身体を張るレポート取材へと活躍の幅を広げ、これまでのアナウンサーの鎧を脱ぎ捨て、業界に風穴を開けた。番組においては、アシスタントや暇ネタや天気予報を読むことが主業務だった女性アナウンサーの仕事は、アシスタントだけではなくメインMCを張るようにまで空気が変わっていった。

では、「女子アナ」の登場以前の女性アナウンサーとは、どういうものであったのか概観してみよう。

## 2（女性）アナウンサー史の中での「女子アナ」

### 2-1 アナウンサーの仕事

これまでのアナウンサー史を概観する前に、アナウンサーの仕事について押さえておきたい。

1980年（昭和55年）発行の『NHK新アナウンス読本』によれば、アナウンサーとは、「…多様な、番組という形をとる情報伝達の中で、多くの職種が準備を重ねた最後の段階で、音声言語による表現を担う職種です。それがアナウンサーの役割」と述べている。放送の送り手の出口にあたるのがアナウンサーだ。その音声言語表現の担い手としてのアナウンサーの特性は、「よむ」「きく」「実況する」という熟達を要する技能にあると位置づけている。ここで言う「よむ」とは、単なる音声化にとどまらない。本当の意味で「よむ」ためには、自分自身の経験を豊かにし、自らの経験から「他人の経験をよみとる能力を身につける」ことが重要である。つまり「よむとは、他人の経験の範囲に関わること」であり、その対象は広く、奥深い。したがって深い洞察力が必要であると示されている。「個性のある語り口」を備え、「わかりやすく、豊かで、きちんと論旨の通る、パブリック・スピーキングの追求者であること」がアナウンサー

---

<sup>3</sup> 「おしゃべりトマト」という昼2時間の縦長ワイド番組。当時の番組編成では画期的な企画であった。この番組の一曜日を局アナが一人で担当した。（原は、当初木曜日で後に火曜日担当）スポーツ情報番組は「ベイサイドスタジオ」という番組で、プロ野球中継とアマチュアスポーツの情報を内容としていた。

一に要求されている資質である。時代の趨勢によりアナウンサーに求められるものが変わっても、役割や資質という本質的な部分において、アナウンサーがパブリック・スピーキングの追及者であることに変わりはない。

次に、実際のアナウンサーの仕事を、①読む②聞く③話す（実況を含む）の項目に沿って示していこう。

① 「読む」とは、原稿（ニュース、ナレーション、お知らせ、CM、提供読み、朗読等）を読むこと。

② 「聞く」とは、インタビュー、取材、番組内でのトーク等

③ 「話す」とは、番組の進行（MC）フリートーク、レポート、実況等

に分類できる。ストレートニュースであれば、ニュース原稿を読むことが主であり、フリートークも時間が限られている。生番組のレポーターは、スタジオから離れ中継にでているためスタジオ進行には絡まないことが多い。それぞれ、番組においてアナウンサーの役割は決められているが、情報番組内においてはすべての要素が絡み合っていることから、オールラウンダーとしての能力が試される。最も、メインのMCまたはキャスターであるのか、サブのMCあるいはキャスターであるか、番組によって立ち位置は変わる。

見方によってはサブのMCやアシスタントの方が、気が楽ではないかと思われがちだが、実際アシスタントはメインのフォローをしながら番組全体を観ていかななくてはならないため、番組内では相当な集中力を要求される。ただ、メインの隣にいて微笑んでいるのではない。

今でこそ、新人の女性アナウンサーであっても報道ニュースを読むことが当たり前のように受け取られているが、「女子アナ」登場前までの女性アナウンサーは、報道ニュースを読む場をなかなか与えてもらえない時代が長く続いていた。

## 2-2 女性アナウンサーの職種

アナウンサーはラジオの開局と同時に生まれた職業である。民間放送局の開局前は、アナウンサーといえばNHKのアナウンサーであった。「JOAK、JOAK こちらは東京放送局であります」という東京日々新聞の記者であった京田武男アナウンサーの声により東京放送局の開局が告げられたのは、1925年（大正14年）3月22日である。翌年、1926年（大正15年）に社団法人日本放送協会が誕生した。この大正の2年間でアナウンサーとして仕事をしたのは女性も含めて12人であった。しかし、辞職や異動があり昭和へ引き継いだのは5人であった。当時はアナウンサーという職業も確立されておらず、名称もなかったのが義太夫の女太夫から「口上言いの先生」などと言われていたという。

ラジオは大正天皇の崩御、続く昭和天皇の即位を国民にアナウンサーの声で伝えた。大正時代に入り、大学野球をはじめとしたスポーツ実況が盛んに行われ、スポーツ放送の人気の高まりと共にアナウンサーという職業も確立していった。多くの名実況も生まれ、今なお語り継がれている。これらは男性アナウンサーの仕事であった。

では、女性アナウンサーはどのような役割を担っていたのか。女性アナウンサーの第一号は東京放送局総裁・後藤新平の推薦で入局した翠川秋子であった。断髪洋装で目立つ女性であったという。料理番組や生活一般の番組を担当していたようだが、七か月で辞めてしまい、10年後、情死する<sup>4</sup>。女性が男性社会の中で職業人として生きていくのは難しく、今で言う職場でのセクシャルハラスメントの被害も受け、「受難」があったと指摘されている<sup>5</sup>。

ラジオ草創期に東京、大阪、名古屋の各放送局に女性アナウンサーが入局したが、皆短い期間で退職している。アナウンサーという職業を通して新しい道を切り拓いていく状況になかったのかもしれない。ここには「女性が働き続けるには」という古くて新しい問題がすでに提示されている。国語教育学者の上甲

<sup>4</sup> 澤地久枝著『完本 昭和史のおんな』参照

<sup>5</sup> 日本女性放送者懇談会編『放送ウーマンの70年』1994年81頁

幹一は、「女性に名アナウンサーがいないのは、すぐに辞めてしまうからだ<sup>6</sup>」という指摘をしている。労働の在り方とジェンダーはすでに絡み合っていた。

その後、1932年（昭和7年）まで女性アナウンサーの採用は見送られ、この年9人のアナウンサーが採用されたが、女性は松澤知恵というアナウンサー一人であった。久しぶりに採用された女性アナウンサーゆえ期待も大きかった。しかし、海外放送<sup>7</sup>ではニュースも担当したものの、国内向けには、ニュースや株式市況は男性が担当していたので、読むことはかなわず「子供の時間」という番組や料理番組、小鳥の声、歳末風景の中継など、いわゆる暇ネタの類の放送に留まっていた。

以上は、1930年代の女性アナウンサーを取り巻く環境である。しかし、女性にニュースを担当させない傾向は、筆者が入社した1980年代まで続いていた。「女性アナウンサーは、天気予報さえ読めればよい」「女性の声でニュースを読んでも聞いていて信憑性がない」「事件や事故のニュースを女の人の声で読まれてはたまらない」という局内の声も強く、ニュースは男性アナウンサーや男性報道記者が担当していた。

男性アナウンサーのアシスタントとしての位置付けであった女性アナウンサーも、各局での採用人数も徐々に増え、次第に注目されるようになってきた。社会的には、フジテレビの現役女子大生起用番組「オールナイトフジ<sup>8</sup>」の成功により「女子大生ブーム」が起り、「女子大生」という存在が注目されていたという背景も見逃せない。「素人」の可能性と、計算されたものでないコメントや振る舞いの魅力が視聴者に響いたのだ。まだ完成されていない「女子」のアナウンサーという若さ、個性が前面に打ち出されたアナウンサーが注目を集める下地は出来上がっていた。

そして、バブル時代直前に、キー局では女性アナウンサーがニュースを読む姿が目立ち始め、筆者が勤務するtvkでも女性がキャスターやメインMCという位置付けの番組が誕生し、ニュースを読む時代がやってきた。女性アナウンサーの活躍が始まった時代は、男女雇用機会均等法の施行ともほぼ重なる。女性アナウンサーの働き方を法律の面からも考える時代が到来した。このタイミングで登場したのが、「女子アナ」であった。

## 2-3 情報番組と「女子アナ」

「女子アナ」の登場後の活躍はアナウンサーにも視聴者にとっても歓迎すべきことではあったが、女性アナウンサーへ与えたものは功罪相半ばする。番組での露出に伴い注目度が高まり、職業としての認知度も高くなっていった。仕事の領域が拡大した「女子アナ」は、タレントや芸人のようにフリートークをこなし、タレントアイドル化していった。「女子アナ」のタレント化と連動するように、タレントや芸人がアナウンサーの仕事領域へ進出し、アナウンサーとタレントのボーダレス化に拍車がかかった。テレビのコンテンツとしては多様化し、面白くなったと言えよう。

だが、「女子アナ」の活躍の幅が広がったことを喜んでばかりはいられない。なぜなら、アナウンサーとタレントのボーダレス化により、専門職であるはずの女性アナウンサーの仕事の専門性の希薄さが露呈してしまったからである。（気付きとしては、決して悪いことではない。）

---

<sup>6</sup>上甲幹一著『朗読とアナウンス—新しい話し方のために』1963年。上甲幹一（1912～1969年）は国語教育学者。文部省学習指導要領編集委員。名古屋大学教授。

<sup>7</sup>1935年（昭和10年）日本語と英語で行われた短波放送。ラジオ・トウキョウ。すでにオランダやドイツなど十数カ国が海外放送を行っていた。海外放送は開戦をいち早く海外に伝え、その後敵対放送の度合いを強めていく。1945年（昭和20年）終戦を海外の日本人に伝える役目をもって、撤退した。その後1952年（昭和27年）国際放送ラジオ・ジャパンとなり再開。

<sup>8</sup>1983年放送開始。一世を風靡した土曜日の深夜にOAされた関東ローカルのフジテレビ系深夜番組。番組に出演する「オールナイトフジ」は女子大生ブームの火付け役となった。<http://d.hatena.ne.jp/keyword/>参照 最終アクセス2018.03.14

バブル期に活躍の場を広げアナウンサーという枠を拡張していった「女子アナ」は、その後、個人的には放送メディアに限らず様々な分野へ活動の場を移していった。彼女たちが、従来のアナウンサーとは違う「女子アナ」というファイルを開いたことは確かだ。現在もなお、情報番組の中で輝きを發揮している「女子アナ」の存在がその証左である。しかし、現在の「女子アナ」には、バブル期に登場した「女子アナ」にはなかったまなざしが付与されている。「女子力」に込められた「女子」そのままのまなざしである。彼女たちは、「可愛い、綺麗、気が利く女の子」という「理想の女の子」のイメージを引き受けている。アナウンサーとしての専門性や技術の前に、女性性に注目が集まり、アナウンサーとしての存在価値が高められているのである。

このような「女子アナ」の立ち位置を確立した場が、情報番組である。次に、情報番組と「女子アナ」の関係を見ていこう。

情報番組 (Information program) とは、何らかの情報を提供することを目的としたテレビ番組の一種、およびワイドショーの別称である。1999 年からワイドショーの報道化が進み、2000 年以降からはニュース番組の番組構成においてワイドショーで扱うソフト・ニュースを含むようになった。情報番組には、朝の情報番組、ワイドショー、生活情報番組、バラエティー番組と融合させた「情報バラエティー」等に分類されている<sup>9</sup>。

「女子アナ」は情報番組の中で更に認知度を上げていった。多くの情報番組の場合、メインの男性 MC が、番組で取り上げるトピックの内容に集中できるよう時間読みやコーナーの振りなどは「女子アナ」が務めるようになった。もちろんお知らせ原稿や、ニュースも読み、ゲストとのからみもある。

多くの情報番組は、スタジオ内がファミリーになるように設定されている。男性の MC が父親 (メイン MC が女性の場合はお母さん)、その隣で支えているのは娘、コメンテーターは (年齢にもよるが) 祖父母、あるいは叔父さんや叔母さん、スポーツニュースは元気なお兄さんやお姉さん、天気予報は隣のお兄さんやお姉さん、時々ゲストもやってくる。このように見てくると、男性 MC の隣には、母親ではなく、若い娘のほうがおさまりがよい。「女子アナ」にとっては最高のポジションなのである。

言葉の意味からとらえれば、「女子」は女の子であり、成熟していない女の人のことを表す。つまり、「女子アナ」はまだ完成体ではない。しかし、笑顔と若さで健気に番組 (= 家) を支えている。視聴者から好感を持たれることは必至だ。

情報番組という枠の中で注目された「女子アナ」は、番組を飛び出して個人の個性をも引き出していった。しかし、いつまでも「女子アナ」ではいられない。働き方の選択に迫られる時がやってくる。

### 3 女性アナウンサーの働き方モデル

「女子アナ」に限らず、絶対的人数も少なかった女性アナウンサーには、生き方や働き方のモデルがなかった。もっとも、女性の生き方や働き方のモデルは、女性の社会進出や社会制度の変化の中でアナウンサーに限らずモデルというようなものはないのかもしれない。結婚と出産、介護における女性の関わり方の度合いが今なお男性より高いことから、仕事と家庭の両立という問題が多くを悩ませている。

本来、アナウンサーとは、テレビ局のアナウンサー試験に合格した局の社員を指す言葉であるが、最近では局の社員でなくてもフリーのアナウンサーという言い方をすることで混乱もある。ここでは、振出が局の社員であるアナウンサーについての働き方を論じていることを改めて確認しておこう<sup>10</sup>。社員であるた

<sup>9</sup> <https://ja.wikipedia.org/wiki/参照> 最終アクセス 2018.03.14

<sup>10</sup> 地方局では、経験者採用が多い。さらに、報道の取材ができるアナウンサーを募集するケースも増えている。また、社員採用でなく局の子会社に身分を預け、そこから派遣されるケースや、初めから契約キャスター、契約レポ

め定年まで働くことはできる。アナウンサーは専門職であるから、異動は問題を起こしたのでなければ本人の意思が確認されなくてはならない。アナウンサー職についているかどうかは別にして、局の社員を貫くという選択がある。

しかし、会社を退職してフリーランスのアナウンサーになる選択をする女性アナウンサーは後をたたない。この場合、マネージメントをしてくれる事務所に所属するか否かを選択し、事務所への所族を選択した後は事務所での所属の仕方も考えなくてはならない。事務所に入っても、指名で仕事が来ない場合はオーディションを受ける。会社という後ろ盾がない分、自由に仕事はできるが先行きの不安はついて回る。

大学卒業後、新卒で出身地ではない地方局で採用された場合も、その局で長く務めることはできるが、2～3年から数年で退職し、事務所に入りキー局や準キー局の番組オーディションを受けて力をつけていくケースも多くある。

会社を退社した後、起業する女性アナウンサーもいる。地方局では地元の出身者であれば、アナウンサーとしての能力と人脈を生かし、自らがタレント事務所やアナウンサー派遣業、アナウンススクールやマナースクールの経営者となることもできる。また、最近では、大学の教師や文化センターの講師などで活躍するケースもある。

プライベートとして、特に出産は産休制度がある社員での出産の方が、出産後戻るところがあるため安心ではある。しかし、復帰後今までのポジションでいられるかどうかは、局の事情による。出産後さすがに「女子アナ」ではいられない。「女子アナ」は、もとより期限付きのポジションなのである。

#### 4 消費される「女子アナ」

期限付きのポジションである「女子アナ」は、競争も激しい。「女子アナ」予備軍は多く、年ごとに若い新人が入社してくる。「女子アナ」は、常に消費されている。前述した通り、バブル時代に登場した「女子アナ」は従来の女性アナウンサーになかった勢いを会社が後押しをし、時代にもマッチングした新しさがあった。それから30年余りを経て「女子アナ」という呼称が包含する意味も変わってきた。メディアで拡散されている「女子力」が示す内容と同様なまなざしが存在している。菊池夏野氏は「女子力」を以下のように分析している<sup>11</sup>。

「女らしさ」は性質を表します。一方、女子力は昔ながらの女性の役割を内包しながら、それを能力として「高い」「低い」として計量化し、本人が自発的に努力して身につけ、ランクアップさせるべきものという、新しい価値評価を持ちこんでいます。そこには「能力」「競争」というここ十数年で広がった新自由主義的な価値観が反映しています。

女子力という言葉に含まれている昔ながらの性役割は、「女子アナ」の誕生時から内包されていたものだったと言えよう。「女子アナ」は、あくまでテレビの画面上の事であるが、この新しい価値判断を分かりやすく象徴している。今や「女子アナ」を目指す学生たちに、女性性や女らしさへの依存に対する前世代のこだわりや反発はない。新しい価値判断を最大限に楽しもうという世代のまなざしが「女子アナ」を支えている。

筆者も含めて「女子アナ」という言葉やそれにまつわる現象に異議や不快感を覚えている女性アナウンサーもいる。例えば、元TBSアナウンサーの吉川美代子氏は、『女子アナ』という言葉には、意識していなくてもどこか軽く見下すような響きがあって嫌い』『女子アナ』と呼ばれて浮かれていないで、プロと

---

ーターと決められている契約形態もある。雇用形態により、給料や社会保険、ユニオンの有無など様々である。

<sup>11</sup> 菊池夏野 名古屋市立大学准教授 朝日新聞 2017年2月19日朝刊 9面フォーラム「女子力」って？より。

しての技術を磨いて欲しい<sup>12)</sup>と、「女子アナ」の呼称に込められた一種侮蔑的な感覚を指摘している。

同じく元 TBS アナウンサーの小島慶子氏は、「一般社員の女子アナをタレントのように扱うのはどうか」という質問に対して「どんな職場でも、若くてちょっと可愛いといわれている女性がやらされていることをテレビ画面で演じざるを得なくて、それがあたかもプロの職業みたいになっている。それが新鮮だったのは30年も40年も前。(中略)“女子アナ”という言葉に、そういう女性の扱われ方が象徴されている<sup>13)</sup>と語っている。

「女子アナ」という職業において、「女性だから番組につけない」状況から一変して、「女性だから女性性を前面に出すことで活躍できる」という状況になった。基本的には小島氏が指摘するように女性アナウンサーの扱われ方は女性性を切り離すことができない。アナウンサーという専門性より女性性が勝っているのである。

では、女性アナウンサーの専門性とはどこにあるのだろうか。男性アナウンサーには、スポーツ実況という専門性の高いジャンルが存在する。スポーツ実況の分野において、女子マラソンや、ローカル局での野球やサッカー中継などで活躍している女性アナウンサーも散見するが、まだまだ数も経験も少ない。これから飛躍的にスポーツ実況を行う女性アナウンサーが増えて行くとは考えにくい。そうであるならば、果たして男性アナウンサーが行うスポーツ実況に比肩するくらいの女性アナウンサーの専門性はどこにあるのだろうか。女性アナウンサーでなければならないというジャンルを獲得できるのだろうか。

この問いは、女性アナウンサー、「女子アナ」の仕事の将来性と、延いては女性アナウンサーは局の社員である必要があるのだろうか、という問いへ発展していく可能性がある。

## おわりに

昨年2017年8月にソニーと共同通信デジタルとによる情報読み上げ動画作成システムが開発され、バーチャルアナウンサー「沢村碧」が誕生した。テレビ局やラジオ局などの番組制作やコンテンツ制作会社に提供していく予定だという<sup>14)</sup>。実際にラジオ番組で天気予報を読み上げている。さらに、兵庫県のFM局「Kiss FM KOBE」では、2018年の4月からAIアナウンサーが原稿を読むニュース番組が始まった。毎日新聞によれば、AIアナウンサーが注目を集めたのは今年の夏で、エフエム和歌山が天気や災害情報の放送で「ナナコ」と名付けたAIアナウンサーの運用を始めたという。「Kiss FM KOBE」では、「予想以上の労力削減」ともなり、このような試みは「全国の放送局で広がっている」と伝えている<sup>15)</sup>。

このような読み上げシステムの改良が進めば、ただ読むだけのアナウンス業務はAIアナウンサーが担うことになるかもしれない。もっとも、人の喋りそのものが良いということではなかなか直ぐに導入には至らないかもしれないが、AIアナウンサーに放送局が注目している点や、読みの機械化の性能が上がれば状況が一変する可能性もある。加えて人件費削減にもつながるという点は経営者サイドからすれば利点である。女性アナウンサーだけでなく、アナウンサーを取り巻く環境は、テレビの観られ方同様ドラスティブな変わり方を展開するであろう。

視聴者側からすれば、「女子アナ」の行く末や、タレントとのボーダレス化により誰がアナウンサーで誰がタレントなのかは問題ではない。しかし、職業として「女子アナ」を捉えた場合これらの問題は看過できるものではない。

「女子アナ」の登場と活躍によりアナウンサーは憧れの職業となり、アナウンサーを目指す学生も格段

<sup>12)</sup> <https://dot.asahi.com/wa/2014060600056.html> 参照 最終アクセス 2018.03.14

<sup>13)</sup> [https://www.huffingtonpost.jp/abematimes/kojima-keiko-announcer\\_a\\_23312579/](https://www.huffingtonpost.jp/abematimes/kojima-keiko-announcer_a_23312579/) 参照 最終アクセス 2018.03.14

<sup>14)</sup> <http://avataragentservice.jp/> 参照 最終アクセス 2018.03.14

<sup>15)</sup> 毎日新聞 2018年4月11日朝刊

に増えた。中でも情報番組を希望する「女子アナ」志望者は後を絶たない。しかし、情報番組で微笑んでいる「女子アナ」の姿は女性アナウンサーのたった一面に過ぎない。これから「女子アナ」が専門性を確保していくのか。さらにタレント化していくのか。あるいは新しいアナウンサー像を作ることができるのか。「女子アナ」という職業が直面している問題である。

#### 【参考文献】

日本放送協会、1980、『NHK 新アナウンス読本』日本放送出版協会

日本女性放送者懇談会編、1994、『放送ウーマンの70年』日本放送出版協会

澤地久枝、2003、『完本 昭和史のおんな』文藝春秋社

上甲幹一、1963、『朗読とアナウンスー新しい話し方のために』現代教養文庫

長谷正人 太田正一編著、2007、『テレビだヨ！全員集合 自作自演の1970年代』青土社

原良枝、2016、『声の文化史ー音声読書としての朗読』成文堂